

# 月の王と月の船

保立道久 20200215 (南山大学北條科研)

## はじめにー原型、イサナ神話

### 1 世界の宇宙創造神話

①ギリシャ、ウラノスとガイアの神話  
天空ウラノスと大地ガイアがつねに相抱擁している、二人の間に生まれた子供たちが鬱陶しさに苦しんでいたのはじまる。そのため、子供たちは、両親を引き離そうとしたが、結局、男子クロノスが大鎌をふるってウラノスの陽根を切り取ったので、ウラノスは苦しみ、驚いて高く遁れ退いたという。

②ニュージールランドのマオリ族、ランギとパパの神話  
天父ランギと地母パパの神話。固く抱き合っていた二人の間で暗黒の中にいた子供たちは、二人を引き離し、母なる大地ランギをみずからのものでしようとして、天父を突き上げた。

③ミクロネシア、ギルバート諸島の神話  
天父デ・バボウと地母デ・アイは太陽と月と海を生んだ。

④インドネシア、モルッカ諸島のセラム島の神話  
むかし、父なる天は母なる大地の上に横になり、性交していた。天と地は、当時はまだ今日よりも小さかった。この天地の結婚から、子供としてウプラハタラが生まれ、ついで弟のラリヴァと妹のシミリネが生まれた。彼らは両親の天と地との間に住む場所がなく、ついにウプラハタラが天を上へ押し上げた。すると大地震が起こり天と地は拡大して今日のように大きくなった。天と地の分離の際には、地上にはまだ暗黒が支配していた。ところが、大地震のとき、火が地中から生まれ出し、地上には木や植物が萌え出で、山々がそびえ立った。ウプラハタラは、ダンマルの樹脂で大きな球をつくらせて火をつけ、天にほうり上げて、日と月を作った(大林太良『神話の系譜』206頁)。

### 2 古層の神々、イサナ神

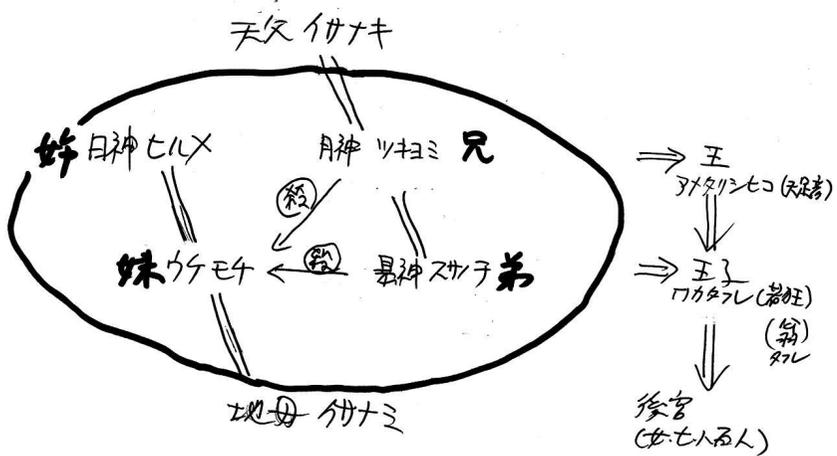
イサナミの神生は火山噴火……セラム島の神話に一致

(ポリネシアなど共通)

イサナ神は南方系の海の神話、

イサナは鯨。キは雄、ミは雌。

イサナ神の信仰は瀬戸内海から熊野・伊勢、若狭に広がる。さらに広いか(坂江渉)



## 1 倭国の月の王と新嘗祭・月嘗祭

### 1 大王は月神、太子は「若狂」、

①隋書 開皇二十年(六〇〇)。

倭王あり。姓は阿每、字は多利思比孤、阿輩雞彌と号す。使を遣わして闕に詣る。所司をして其の風俗を訪わしむ。使者言ふ、「倭王は天をもつて兄と為し、日をもつて弟と為す。天いまだ明けざる時、出て政を聴き、跣踏して坐し、日出づれば便ち理務を停め、云ふ我が弟に委ねむ」と。高祖曰く「此れ太いに義理なし」と。是において訓へて之を改めしむ。王の妻は雞彌と号す。後宮に女六・七百人有り。太子を名づけて利歌彌多弗利(ワカミタフリ)となす。城郭なし」

②倭王は天は兄、日は弟。つまり月の王

倭王は未明(午前三時頃)に後宮を出て、政治をとり、日の出の後には後宮に戻る。倭王は神話意識では「天」と「日」にならぶ存在。……倭王は月。

倭王の最初の称号のアマタリシヒコ(天で満足しているもの)。倭王の「満月」という自己意識。

『老子』四四章の「知足」、四五章「大盈も沖しきが若くして、その用は窮まらず」をふまえたもの(保立『現代語訳 老子』ちくま新書)。

③ワカタフレ……「若翁(狂)」

ワカタフレは「若翁」と書くが、「翁」には「狂」の意味。若い王子はメチャクチャ、暴れてよいという風習。

### 2 新嘗祭は未開の風習

①月神II倭王は「夜の食国」の支配者

イサナキの神生みと三神の分担(『古事記』)

- ①アマテラスは「高天原」、
  - ②スサノヲは「海原」、
  - ③ツキヨミは「夜の食国」
- 王権の三つの側面(『書紀』応神紀)
- ①「天津日継」、血統的な靈威。
  - ②「山海の政」、山野河海(無縁に対する支配)
  - ③「食国の政」

ツキヨミの「夜の食国」支配は、王の「食国の政」に対応する

②ツキヨミ神話……ウケモチ女神殺し

ツキヨミ神話(『書紀』五段異伝二)  
ツキヨミはイサナキから「日に配びて天の事を知れ」と命令され、天に昇ると、先にいたアマテラスから地上に降りて保食神の様子を見てこいと命ぜられた。女神ウケモチは歓待のために、その口から反吐をだすように食物を用意するのを見て怒って剣を抜いて女神を殺害。

このためにアマテラスとツキヨミは「相見じ」、「一日一夜、隔離り住みたまふ」ことになり、夜が生まれた。女神の遺骸から牛馬・粟・蚕・稗・稻・麦・大豆・小豆が生じた。ツキヨミは「夜」を作り出し、そこに「食国」の富を作り出した。

この神話は『山城国風土記』ではツキヨミが、山背葛野郡の桂里に降臨し保食神を「殺した」という形で残り。山背葛野郡桂里は月神の田、宇多アラス田があり、それが新嘗祭のための屯田となっている(菊地照夫文獻) 月神が降臨して女の身体を所有するための田地。屯田が新嘗祭のために置かれている。

③大嘗祭・新嘗祭・月次祭は「月嘗祭」。満月祭

新嘗祭は饗宴(食物儀礼)と王が神となる神婚儀礼(性的儀礼)

王も女の身体を支配する。

倭王は月神が乗り移ったようにして「食国」の食物を消費し、国富の象徴として貢上された女と神婚を行う。

④隋皇帝は未開の風習を非難。

未開社会では人々は「夜」を中心に生きる。一日は夜から始まり、夜の饗宴がすべての中心。

## II 天地鎔造神話と月の船産靈（ムスヒ）神段階

### 1 天地鎔造の神と月神・日神

『書紀』四五二年

阿閉臣事代、命を銜けて、出でて任那に使す。是に、月神、人に著りて謂りて曰く、「我が祖高皇産靈、預ひて天地を鎔造する功有り。民地をもつて、我・月神に奉れ。若し請の依に我に献らば、福慶あらむ」とのたまふ。事代、是によりて、京に還りて具に奏す。奉るに歌荒櫛田をもつてす。<歌荒櫛田は山背国の葛野郡にあり>。老伎県主の先祖、押見宿弥、祀に侍ふ。

〔日本書紀〕顕宗紀三年二月一日条

阿閉臣事代、王命をうけて朝鮮の「任那」に使者と出かけ、その途中の老岐で、「月神」がとりついた状態になった人から託宣をうけた。それは「私の祖先であるタカミムスヒは、そもそも天地を鎔造したという大きな功績をもっている。だから私に民地を奉獻せよ。その結果、山城国葛野郡の「歌荒櫛田」という田地が月神に奉獻され、その祭祀は老岐県主の先祖にあたる押見宿弥が担当した。

二ヶ月後、今度は対馬の日神がとりついた状態になった人から同じような託宣をうけた。それは「磐余の田をもつて、我祖高皇産靈に献れ」というもので、日神は寄進をタカミムスヒに行えといった。その田地の管理と祭祀は、対馬下県直の一族の担当になった。

創造神の変化……タカミムスヒとカミムスヒ

### 鑄物型・鍋甕型宇宙

「天地鎔造」とは鑄物を鎔鋳炉で作るように、世界を作る（原典は文選）。天は堅い金属・岩盤できている。地の底にも堅い金属・岩盤があって、世界は巨大な卵のようなもの。鑄造文化の中国神話（参照保立『現代語訳 老子』ちくま新書）

## 2 長胴甕型宇宙の世界像と「壺」

### 図①②（宣長・篤胤的宇宙観）

人々が天地の全体をどう考えていたか

『古事記伝』に付載された宣長の弟子の服部中庸の『三大考』の図。「天・地・泉（地下）」の概略

それまで繋がっていた「天・地・泉（地下）」が最後に分離した（と想像した）様子を描いたもの。服部は「天」と「地」の間には昔は「天浮橋」があったが、天地分離とともに消失し、その痕跡は火山とその噴煙のように残っているとしており、「地」と「泉」の間もオホクニヌシは生身で往来していたようだから、昔は往還の道があったが、その後は消失して、「地」と「泉」も分離したと論じている。

### 図③（それを長胴甕型に切り替え）

宇宙が鎔鋳罐のような形をしているとすれば、それは上部は天蓋を描き、下部は「根の国」を囲い込んだ大きな円筒のような形をしている。

火山による世界鎔造神話。

「鎔鋳罐……長胴釜十甕——火山」という幻想  
中村啓信によればタカミムスヒの妻神であるカミムスヒは甕神。『古事記』によると、カミムスヒが焚く火は天まで届き、天にできた新室の天井裏に煤が八拳の長さも垂れ下がらせるほど巨大なものであるという。巨大な甕が宇宙構造として幻視されていた。

勝俣隆は、ウノ・ハルヴァの浩瀚な書、『シヤマニズム』が「アルタイ系諸民族の世界観では、天は、天幕の屋根状に大地を覆うもの、あるいは大鍋を伏せたような半球状をした堅固な蓋と観念された」と述べている。同じ宇宙観

### 図④⑤（馬王堆飛衣の「壺型宇宙」）

中国湖南省長沙市の馬王堆墳墓の木棺の蓋に懸けられ

た「棺衣（飛衣）」に描かれた「壺型の宇宙」。

現世が巨大な「壺」のなかに位置している様子  
上部は蛇身の女神・西王母が統括する天上世界  
中段は地上の世界、  
下段は地下の世界

その地上世界と地下世界が「壺」の型の中にある  
壺とみえるものの器壁は龍の身体からなっている

小南一郎「壺型の宇宙」によれば、この観念は古くから東アジアに広く分布する。壺型の宇宙像が、老荘思想・神仙思想とともに神話時代の倭国に入ってきていたことは十分に考えられるのである。

### 図③ 鍋甕型宇宙の想像図と近似

### 3 「月・日……夜・昼」

図⑧（勝俣隆作成図）『星座で読み解く日本神話』  
雷神タカミムスヒの矢による天蓋の穴、これが星

### 図⑥における日月の運行

地上が夜で、「月」が天蓋の下を通っている夜は、「日」は天蓋の上、裏側を通っていると考えていた。

天蓋が岩盤性の確固たる物質の層である以上、この時は地上に「日」の光は届かず地上は夜で、天蓋の穴は星から光がさしてくるだけ。

地上が昼間するとき、「日」は天蓋の下。

月は「月読命」のいる「根の国」の周囲にいる

「月」「日」は鍋甕型宇宙の横っ腹に開いた大きな通り穴から出入りしていたことになるだろう。

日月分離の神話がこれ語っている。

### 4 「月の船」

(一)天の海に 月の船浮け 桂梶 懸けて榜ぐ見ゆ 月人 壮子 (2223)

(二)秋風の清き夕に天の川舟漕ぎ渡る月人壮子 (2042)

(三)大船に真楫しじぬき海原をこぎ出で渡る月人をとこ (3611)

(四)山のはのささらえをとこ天の原門渡る光見らく良しも (3888)

(五)奥つ国領く君が染屋形 黄染の屋形 神の門渡る (3888)

### 「月の船は死の船」(5)

「黄染の屋形」、「死の国におもむく」月の船の恐ろしい姿」  
（松前健「死の由来語と月の信仰」『日本神話の新研究』松前は「月は人間に死をもたらす恐ろしい神であり、その姿をみることはタブーであった」。

### 月の船・銀河・天石鞞の画像

珍敷塚古墳壁画を

「月の船」が「神の門」を渡り月世界へ行く情景

左手にゴンドラ型の船、その後部に梶をとる男。船の舳先には鳥が立ち、頭上には二重円（太陽）、船の舳先に止まる鳥は「鳥」。二本の横線の上を右側にむけて渡り向かっている。

一番右には小さな二重円（月）。そばには蛙。蛙は月に住む水の精

太陽の照る現世の昼間から出発して月に向かうという死の物語を語っている（普通は太陽船というが月でよい。」  
三つの「鞞」とその中に入った矢  
これは天神のもつ矢

死の旅で天上を通るものは、その矢を目撃する（天空の星座で「鞞」の形状に似るのは鼓星Ⅱオリオン座。  
死者が雷神化するという観念

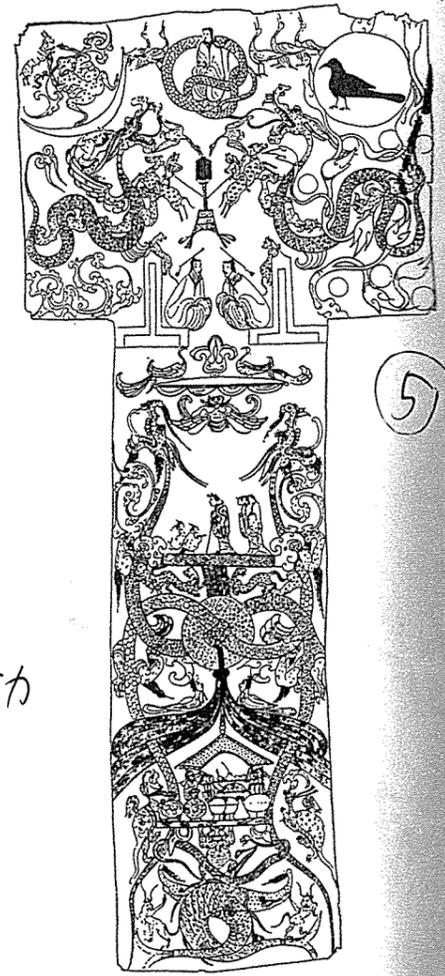
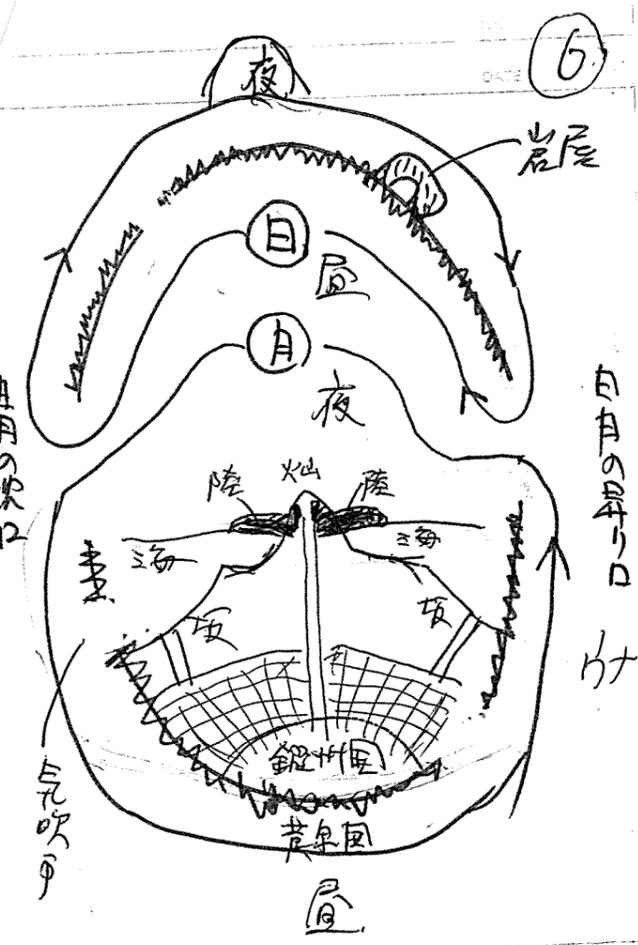
### おわりに

月は時？

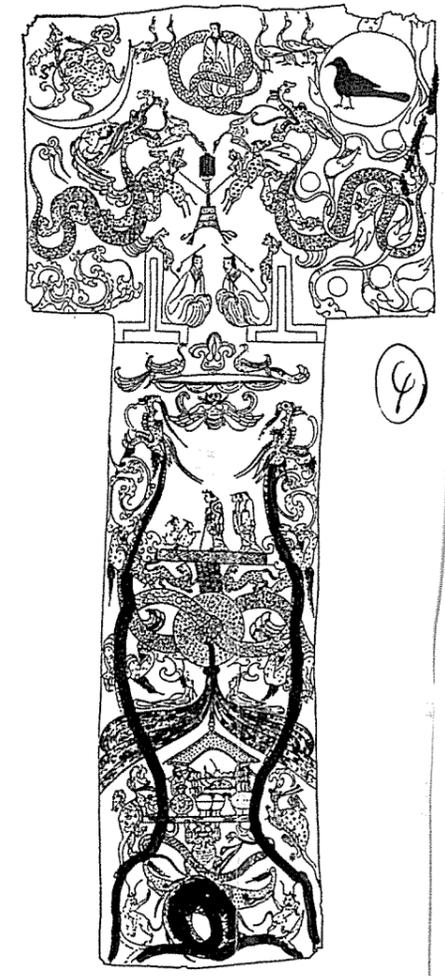
あかつき……あかつき

月と調

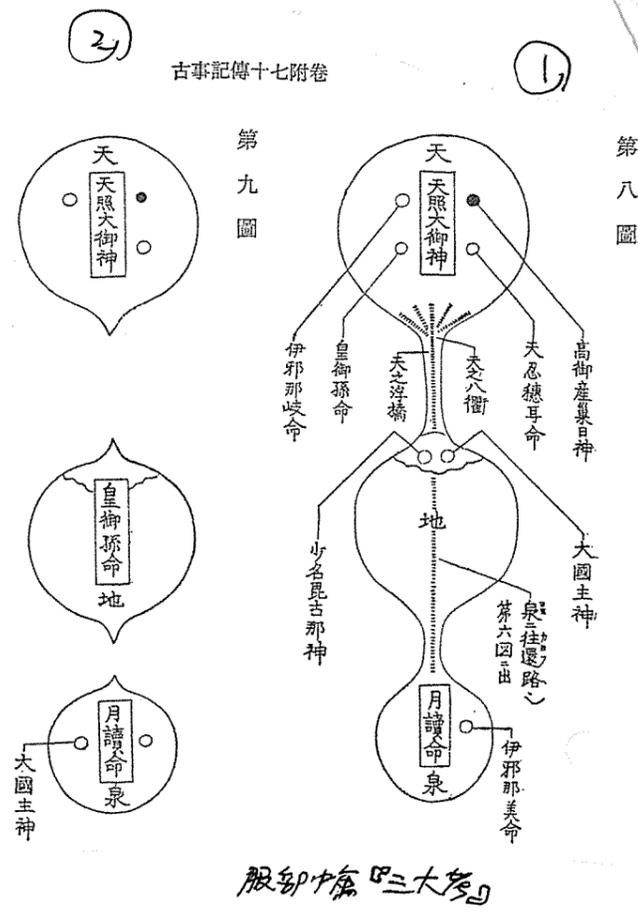
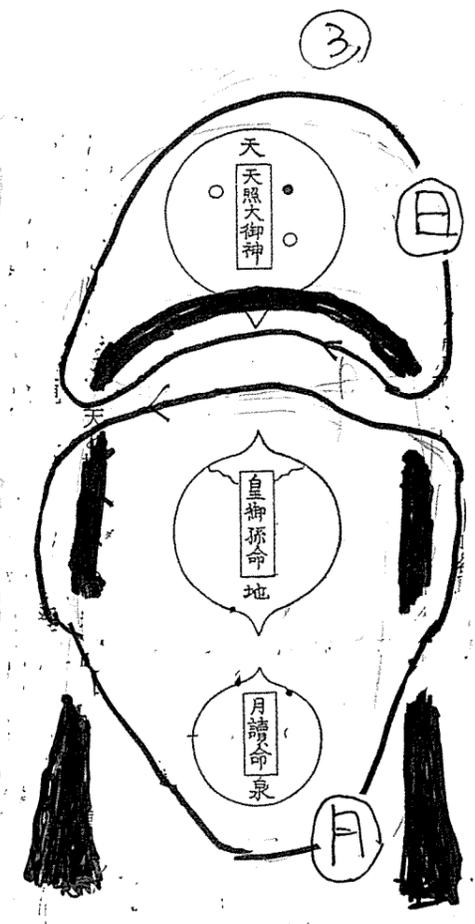
月は憑き、尽きる。そして「つくなふ」は物に呪力がかかっていること。「御調」とは王に呪を懸けられ占取されたものか。



圖二 馬王堆一号漢墓出土“非衣”



圖二 馬王堆一号漢墓出土“非衣”



服部中隆『三大神』

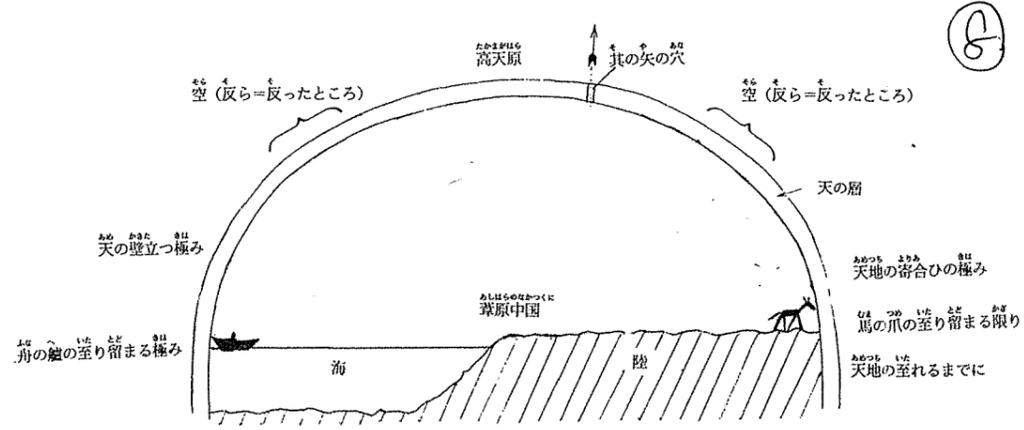


図6 古代日本人の宇宙観 天地(天海)接合の観念

勝俣隆



2 福岡・珍敷塚



3 福岡・鳥船塚

4 熊本・弁慶ヶ穴

6 福岡・五郎山

図10 鳥をのせた船の埴輪 (1), 古墳壁画の船 (2~6)